

公害規制の見直しを望む

竹下 健次郎*

去る1月中旬、私は米国ニューメキシコ州のH製錬所を見学する機会に恵まれた。その工場では、近くの銅山から約1.8%の貧鉱を採掘し、浮選法によって約17%にアップし、さらに98%以上の粗銅に製錬していた。私は日本の銅山をまだ一度も見たことがないので、この工場の環境について比較論評することは慎みたいが、日本の厚生省ならば恐らく黙視しないであろうと思った。煙突から排出する亜硫酸ガスの回収率も約65%であり、日本の95%以上とは比較できない状況であった。

しかし私は、この工場に関する限り、あまり余計な規制は必要ではないかと思う。というのは、その工場の周辺には民家が一軒もなく、人々はそこから約30km離れたS市という町に住んでおり、車で約20分ほどドライブすると、まるで箱根か軽井沢のような風景が展開する。アメリカでは車なしで生活することはできないが、道路は整然と完備しており、30kmや50kmは物の数ではないようだ。私はその風景の中で今年2才になる初孫と再会を楽しみながら、3泊4日を過ごした。何気なく窓から庭を見おろすと、小さな兎が繁みから飛び出した。その時不図私は“アメリカの国はいいなあ！”と思い、同時に日本の公害の規制の在り方に不合理を覚えた。日本はたしかに狭い国には違いないが、公害の規制基準を一律にすることなく、地域によって柔軟に対応できるように知事や市長に大巾な権限を持たせるべきではなかろうか。動物相や自然林の保護が大切なことは論をまたないが、「ネズミ一匹も殺してはならない」「杉の木一本も伐ってはならない」というような印象さえ与える現在の規制のやり方はどうかと思うのである。また、すでに歴然と公害を発生している地域においては、徒らに実現できそうもない厳しい基準を振りかざすことなく、周辺の住宅を移転せしめるか、もしくは工場等を撤去するように行政指導する方がより現実的と思えてならない。

人間は誰しも、白砂青松の美しい自然の中で呼吸する方が健康のためには良いであろうが、「水清ければ魚棲まず」の諺のように、空気だけ吸っていては生きていけそうもない。発電所を憎んでも、電気なしでは生活できない社会となっている。

さらにまた、水銀の排出規準値についても早急に改正する必要がある。すなわち、水銀については「不検出」とされているが、分析技術の進歩した今日では0.5ppbまで検出できるのである。この値は、50億人の中の1人の犯人を検挙できるということであり、驚異的な検出力がある。私は大学4年生のときに1年間水銀を吸い続けた経験の持主であるが、水俣病の症候は出現しなかった。必要以上の規制は逆に人間生活を破壊することに思いを致すべきではなかろうか。私は、水銀の排出基準値として、

*九州大学生産科学研究所教授 工学博士 当協会常任理事

メチル水銀は不検出(0.1 ppm)、全水銀は0.1 ppmで十分だと思う。水銀で汚染された魚にしても、1日に10 kgも食べるわけではないから、そう神経質になる必要もなかろう。科学的に汚染の実態を常に監視しながら、一般住民に安心感をもって生活できるように指導することが行政の責務と思うのである。

カドミウムについても同様である。私は医学の専門家ではないが、カドミウムが直接にイタイイタイ病の真の原因であるかどうかに疑問をもっている者の一人である。カドミウムは他の多くの工場でも使用されてきたが、イ病とは一義的に直結していない。現行規制値の再検討を切望する所以である。

ひ素についても一言いいたい。ミルクに混入して乳児に飲ませるというミスさえしなければ、少々温泉水に含まれていても影響はないと思う。人為的汚染と天然現象による汚染とは区別して貰いたい。地熱エネルギーの開発はわが国のサンシャイン計画の一環であるが、ひ素を一般公害の規制値と同様の基準値をもって律するならば、地熱の開発は恐らく不可能となるであろう。

今後、環境庁当局の科学的、独創的な行政指導を切望して止まない。